

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究 (B)
研究期間：2006～2009
課題番号：18320072
研究課題名 (和文) 東アジア残留日本語と日本語諸方言との関連にかんする研究
研究課題名 (英文) Correlations between Japanese Dialects and the Japanese Language Remaining in East Asia

研究代表者

真田 信治 (SANADA SHINJI)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00099912

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：言語学、日本語学、残留日本語、方言分析、言語接触

1. 研究計画の概要

アジア太平洋地域には、戦前・戦中に日本語を習得し、現在もその日本語能力を維持・運用する人々が多数存在する。本研究では、これらの地域において日本語を第二言語として習得した人々を対象にしたコーパス（談話資料）を作成し、それを分析しつつ、主として、次の点を明らかにすることである。

(1) 日本語習得環境：植民地、支配地で行われた戦前・戦中の日本語教育はどのようなものだったのか。また、日本語習得環境として学校以外にどのような場所があったのか。それらの場所での日本語との接触状況はどのようなものだったのか。

(2) 日本語の社会的役割：地域の言語生活において、当時の日本語が果たした社会的な役割はどのようなものだったのか。また、その後あるいは現在、日本語が果たしてきた／果たしている社会的な役割はどのようなものなのか。

(3) 日本語の維持状況：日本が撤退して数十年が経過したが、現在これらの地域に居住するかつての日本語学習者はどのような種

類の日本語を維持しているのか。

いずれも、言語の習得・維持・後退にかかわる研究に幅広く貢献するはずの課題群である。特に半世紀以上にわたる第二言語の維持といった事象を取り上げて研究対象としたものは世界的にもほとんど例を見ない。なお、各地の話者たちは現在その多くが 75 歳以上の高齢に達しており、その日本語運用データの収集はまさに緊急を要するのである。

2. 研究の進捗状況

これまでの調査研究によって明らかにしえたのは、以下のような点である。

(1) 日本語習得環境について：考えられる要因には、次のようなものがある。

① 習得開始の年齢が 8 歳前後の言語形成期間中であったこと。習得のあるレベルを超えると第二言語は衰えないと言われるが、当該地域の日本語話者の多くはすでにこのレベルを超えていたものと思われる。

② これら地域の日本語が外国語ではなく彼らの第二言語であり、母語話者が多数居住していたこと。

③学校での教育がすべて日本語で行われ、学校で日本語以外の言語を話すことが罰を与えられたこと。

(2) 日本語の社会的役割について：当時、社会で活動するためには日本語が前提となっていた。そして、学ぶ側にもその要求が（強制されたものであったとしても）存在した。戦後は、台湾やミクロネシアなどで異なる母語を異にする人々の間でのリンガフランカとして用いられ続けている（台湾の一部ではクレオールが形成された）が、それ以外には日本語はどの地域においてもほとんど運用されず現在に至っている。（ただし、台湾の原住民族諸語やミクロネシアの諸言語にはかなりの日本語が借用されている。）

(3) 日本語の維持状況について：これら地域の話者が話す日本語には、言語としての合理化（簡略化）が進んでいる。また、現地音からの転移がそれぞれの日本語を彩っている。なお、居住していた母語話者の出身地とのかかわりで、台湾日本語は九州北部方言をベースとしたものになっており、サハリン日本語は北海道方言をベースとしたものになっている。ただし、日本語能力に関しては、話者による個人差が各地ともに著しい。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）それぞれの地域の話者の協力を得て、フィールドワークは順調に進んでいる。ただし、朝鮮半島（コリア）での調査がまだ不十分なので、この地におけるさらなる展開を企画しているところである。

4. 今後の研究の推進方策

当該地域の日本語話者の日本語能力に関しては、話者による個人差が各地ともに著しい。さらに各地域においてできるだけ多くの

話者を対象に調査を実施し、データを分析して、その多様性を解明するとともに総合的な考察を行い、報告書をまとめる予定である。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

①真田信治・簡月真、台湾における日本語クレオールについて、日本語の研究、査読有り、4-2、2008、69-76

②真田信治、戦前の南洋群島における日本語教育を垣間見る－N氏へのインタビューを通して－、国語論究、査読無し、13、2007、161-183

③真田信治、樺太（サハリン）における言語生活を垣間見る－残留コリアンHさんの事例から－、國學院雑誌、査読無し、108-11、2007、325-334

〔学会発表〕（計9件）

①真田信治、東アジア残留日本語と日本語諸方言との関連にかんする研究、国際学術シンポジウム、2007.11.3、韓国・中央大学校日本研究所

〔図書〕（計1件）

①真田信治、和泉書院、越境した日本語－話者の「語り」から－、2009、128